SHIMOIZUMI Zengyo

下泉全暁

地蔵菩薩

地獄を救う路傍のほとけ

お地蔵さんの人気の秘密がわかる解説書の決定版！

人々の苦を本人に代わって引き受けてくれる地蔵菩薩。
子供の守り本尊であると同時に、地獄で苦しむ衆生の救済者でもある。
本書では、地蔵経典や地獄の様相、霊験譚、さらに日本各地の信仰形態などを116点の写真とともに紹介しながら、地蔵菩薩を総合的に解説する。
巻末には「全国地蔵霊場一覧」を付す。

春秋社　定価（本体2400円＋税）

地蔵菩薩

地獄を救う路傍のほとけ

9784393119112
1920015024008
ISBN978-4-393-11911-2
C0015 ¥2400E
定価（本体2400円＋税）
春秋社

地蔵菩薩は、多くの仏さまの中で、私たちにもっともなじみの深い仏さまのひとつである。お寺の奥深くにまつられていることもあるが、多くは、道の端に石仏として安置されている。石仏の中で最も多い仏さまは間違いなく地蔵菩薩であろう。地蔵菩薩などと堅苦しく称えるよりも、お地蔵さんと親しく呼んだ方がよほど似つかわしい。（「はしがき」より）

下泉全暁

春秋社

1　地蔵菩薩の縁日

毎月二十四日は地蔵菩薩の縁日とされる。二十四日の由来は中国に求められる。南宋（一一二七～一二七九）の時代に活躍した禅僧、虚堂（きどう）（一一八五～一二六九）の語録『虚堂録』によれば、五代（九〇七～九六〇）の頃、湖北省五祖山の戒禅師が毎月の一日から三十日まで日ごとに仏菩薩を割り当て、礼拝していたという。その儀礼がわが国に伝わり、三十日秘仏という名称となり、各仏菩薩の縁日となったことによるという。ちなみに、二十四日の地蔵菩薩以外では、十八日の観世音菩薩、二十八日の不動明王（大日如来）などがよく知られている。

関西地方では、七月二十四日、あるいは八月二十四日に地蔵盆と称して、辻々の地蔵堂を飾り付け供養する行事がある。たいていは小さなほこらから地蔵菩薩像を運び出し、民家やテントなどの中に設けられた祭壇に安置する。提灯などで飾り付け、町内の子供たちを集めて玩具や菓子を与えたり、大きな念珠を回して地蔵菩薩の真言を唱える数珠繰りの行事などを行う。僧侶が請われて読経に行くこともある。子供のための行事という性格が強く、夏休み中の遊びの一つとして定着じているようだ。

地蔵盆の起源について、真鍋広済氏は三井寺の僧、浄照の次の蘇生説話を指摘する（『地蔵菩薩の研究』三密堂書店）。

昔、三井寺に浄照という僧がいた。まだ出家していなかった十二歳の頃、同年代の子供たちと遊んでいたが、たわむれに僧の姿を刻み、地蔵菩薩と名づけて古寺の仏壇のそばに置き、他の子供たちと一緒に遊んでいた。季節の花を手折って、その像に供えたりするまねをしていたのだが、飽きて、そのままにして遊びに行ってしまった。

成長して出家し、浄照という名前となり、師僧について教えを学び、修行に明け暮れた。そしてついに、顕教と密教の教えを学んで、まことに尊い僧となった。

ところが、三十二歳で病気になり、しばらくの患いで亡くなってしまった。すると、閻魔法王の使者で猛々しい者が二人現れ、浄照を捕まえて、黒い山のふもとに追い立ててきた。その山の中には大きく暗い穴が一つあった。その穴に浄照を押し込んだのだ。浄照は恐ろしさのあまり何がなにやらわからなかったが、私は死ぬんだとだけはわかった。そして、生きていたとき、法華経を読誦し、観音菩薩や地蔵菩薩を熱心に供養していたので、このたびだけは私を助けて下さいと念じながら、穴の中を落ちていった。すさまじい風が目に当たって痛いので、手で目を覆った。そしてはるか下に落ちていって閻魔法王庁へ到着した。

四方を見回してみると、たくさんの罪人がそれぞれに苦しんでいた。泣き叫ぶ声は雷鳴のよ

うだった。そのとき、きれいな姿の小さな僧が現れ、こういった。

「お前は私を知っているか。私はお前が子供の頃、たわむれに作った地蔵なのだ。信心もなくたわむれに作ったのだけれども、それで私とお前とに縁が生まれ、それ以来ずっと、日夜に私はお前を守ってきたのだ。ところが、私が少しよそへ行っている間に、お前はここへ連れてこられてしまったのだ」

これを聞いた浄照は大地にひざまずき、涙を流して礼拝した。すると、地蔵菩薩は浄照を閻魔法王庁へ連れて行き、閻魔法王に訴えて浄照を放免してくれた。そして浄照は生きかえった。

その後、浄照はますます信心堅固になり、山をめぐり歩いて仏道修行に励んだ。

これこそ、地蔵菩薩が衆生をお救いになるということである。たわむれに木を刻んで地蔵と名づけ、教え通りの供養をしていなくても、地蔵菩薩が人を救うのはこのようなのだ。まして、信心を起こし、仏像を造ったり仏画を描いたりして供養する功徳の大きさはいうまでもない。

――『今昔物語集』より

また、江戸時代初期の京都の年中行事を記した『日次記事』（黒川道祐編）という本には、七月二十四日（旧暦）の條に次のような記述がある。

「洛下の童児、地蔵祭　洛下の児童、おのおの香華を街衢の石地蔵に供えて、之を祭る」

洛陽（京都）の子供たちが、七月二十四日に道端の石地蔵に香や華を供えておまつりするというのだから、現在の地蔵盆と変わらない。この書物が作られたのは貞享二年（一六八五）であり、その頃には地蔵盆のような行事があったことがわかる。

同じく七月二十四日の別の項には、地蔵祭という記事がある。

「地蔵祭　昨日より姉小路東洞院の西、地蔵弥陀の両像を家店に安置す。おのおの百万遍の数珠を転ず。明日に及ぶ」

5-1　京都の町中のほこら

姉小路通り東洞院という、現在の京都の中心市街地の一角でこのような地蔵祭が行われていたわけだが、三百年余り後の現在も京都市中で同様の行事が続けられていることからも、地蔵信仰が地域に根付いていることがよくわかる。

『日次記事』には、姉小路のほか、壬生、三条矢田寺、嵯峨油掛など十三カ所あまりの地蔵祭が記されている。

確かに京都市中には地蔵菩薩のほこらが多い。町を歩くと、民家や道路の脇に屋根や格子戸をつけられた小さなほこらをよく見かける。なかには大きな商店街の一角にもある。いつもきれいに飾り付けられ、季節の花が供えてあり、町中に残る信仰の篤さを感じさせてくれる。

2　西院の河原地蔵和讃

子供と地蔵菩薩との深い縁を示すものとして、「西院の河原地蔵和讃」がある。いくつか種類があるが、ここでは見伴上人作とされる「西の河原地蔵和讃」を挙げておきたい。

西の河原地蔵和讃

帰命　頂礼地蔵尊　これはこの世の事ならず
死出の山路の裾野なる　西の河原の物語
聞くにつけても哀れなり　この世に生まれし甲斐もなく
二つ三つや四つ五つ　十にも足らぬ嬰児が
皆この河原に集まりて　苦患を受くるぞ悲しけれ
娑婆と違いて幼児が　雨露しのぐ住家さえ
無ければ涙の絶間なし　河原に明け暮れ野宿して
雨の降る日は雨にぬれ　雪の降る日は雪中に
凍えて皆々苦しめど　哀れ助くる者も無し
実に頼みなき幼児が　むかしは父の手枕に
母に添い寝を幾度の　笑を賜ふのみならず
荒き風にも当てじとて　綾や錦に身をまとい
梅や桜の花よりも　その慈悲浅からず
然るに今の有様は　身に単なる着物さえ
泣く泣く親を慕いつつ　朧に見ゆる河原をも
数も限りも荒砂の　上に集まる幼児が
小石小石を持ち運び　これにて廻向の塔を組む
哀れなるかな幼児が　立廻るにも拝むにも
唯父恋し母恋し　恋し恋しと泣く声は
此の世の声とは事変わり　悲しさ哀れさ骨も身も
砕けて通るばかりなり　親は子の苦を露知らず
今日は七日や二七日　四十九日や百ケ日